

19世紀前半のボヘミアにおける綿布捺染業の展開

御園生 眞

1. はじめに

ヨーロッパ大陸諸地域での工業化過程において、綿工業が重要な役割を果たしていたことは明らかである。その考察の中で、機械制生産の進展を重視する立場から、綿紡績業の機械化に焦点がおかれてきた。しかし、大陸各地域の具体的な綿工業の発展を見るならば、キャリコ・更紗などの綿布捺染業の成長が、機械制綿紡績業や綿織布業の発展を促した事例が多く存在するのである。そこで、本稿の課題は、この論点に着目して、工業化を先導した綿工業における綿布捺染業の重要性について、19世紀前半のボヘミアを事例に分析することにある。

ヨーロッパの綿工業は、17世紀以降のインド産捺染綿布の流入に促されて成長した。その際に起点となったのは、インド産綿布の模倣に始まる捺染業であった。ヨーロッパの捺染業は、ロンドン、アムステルダム、マルセイユ、バルセロナなどの港湾都市だけではなく、18世紀には内陸部の各地でも誕生し、その後の主要綿工業地域の基盤を形成した。そこでは、イギリスのピールやフランスのオーベルカンブなどの優れた綿布捺染業者が活躍し、捺染工程や紡績工程の機械化を先導して、綿工業の発展を促進したのである¹⁾。

このような捺染業を起点とした綿工業の展開は、ハプスブルク帝国でも同様であり、とりわけ、帝国下のボヘミア（チェコ）において顕著であった。綿布捺染業の発展が機械制綿紡績業の成長を促進し、ボヘミアを帝国第一の綿工業地域に上昇させるのである。

ボヘミアでは、中世以来の銀や鉄の生産が盛んで、また、森林地帯でのガラス製造も行われていた。さらに、ザクセンやシュレージエンに隣接する地域の小都市では、ツンフトにより毛織物が製造されるなど、ドイツ人が居住する地域を中心に多様な工業活動が展開されていた。そして、18世紀には、麻織物工業を基軸に、本格的工業化の前提を形成する「プ

ロト工業化」局面に到達することになる²⁾。

最後に、綿布捺染業は、初発から集中作業場での分業体制で製造が行われ、工場生産の先駆けとも考えられる。また、捺染製品は、消費者の嗜好と直結しているために、市場の動向を判断する捺染業者の企業家的手腕に事業の消長が左右され、この点でも興味深い産業であると考えられる³⁾。

2. ハプスブルク帝国における綿布捺染業の形成

ハプスブルク帝国における綿布捺染業の成長は、18世紀前半頃から始まった。1723年に、特権を有する国営オリエント会社の更紗・キャリコ捺染所が、ウィーン南部のシュヴェヒャトに設立された。この企業は、その後に、ウィーンの有力商人達の共同事業に移った。1750年代の同捺染所は、約2万人の家内手工業者からなる紡糸工程と織布工程を問屋制で組織して捺染用の綿布を製造していた。捺染工程では、木版彫刻工、捺染工、補助者など300人以上の労働力を捺染所に集中し、手作業による木版の型押し捺染で更紗やキャリコを製造していた。捺染所が立地していたウィーン南部は、バルカン・トルコ方面からのマケドニア綿やトリエステ港経由のエジプト綿の輸送路に位置しており、原料綿花の調達には有利であったと推測できる。他方で、女王マリア・テレジアの夫君であるフランツ・フォン・ロートリンゲンが、1736年に設立したハンガリーのザシン捺染所でも捺染製品が生産されていた⁴⁾。

ハプスブルクでは、輸入捺染製品には禁止的高関税が課せられていた。しかし、フランスなど異なり、国内での捺染製品の生産は禁止されなかった。このような政策は、結果的に帝国内での捺染業の成長を促す要因となった⁵⁾。

18世紀後半になると、ハプスブルクの捺染業は、新たな段階に入った。この時期のハプスブルクは、

一方で、重商主義的な高関税体制を維持しつつ、他方で、国内産業の育成政策を展開した。具体的には、1763年に、シュヴェヒャトとザシンの捺染所に与えられていた独占権を廃止し、新たな捺染所の設立を促したことである。これにより、帝国内での捺染所の創設が増加した。また、1770年代には、工業活動に対するツunftの規制が部分的に廃止されたため、新しい産業部門である綿布捺染業を含む綿工業の成長が進んだ⁶⁾。

3. ボヘミアにおける綿布捺染業の勃興

18世紀後半に、綿布捺染業の成長を先導したのは、ボヘミアに所領を有する貴族層による捺染所(Fabrik: 作業場は一般にファブリークと呼ばれた)の設立であった。具体的には、キンスキー伯爵、ボルザ伯爵、アウエルスペルク伯爵などが、捺染業に進出した。これらの貴族達は、自身の所領から有望な利益を多く獲得することを目指していた。中でもボルザ伯爵は、1763年に50万グルデンを出費し、400人の家内織布工と4000人の家内紡糸工を問屋制で組織して北ボヘミアのコスマノスで木版を用いた捺染業を始めた。しかし、ボルザ伯爵の捺染所は、その後に十分な成果が得られなかったため、1779年頃に閉鎖された。そして、1793年に、この捺染所は北ボヘミアの有力な綿布捺染業者のライテンベルガーの手に移り、ボヘミアを代表する捺染所に発展することになる。他方、ウィーン南部の地域では、スイス、フランス、ドイツなどの外国人による捺染所の設立が見られた⁷⁾。

北ボヘミアと並ぶ綿布捺染業の中心地域は、プラハ市内とその隣接地域であった。18世紀後半のプラハ市内では、12の捺染所が木版を用いた手作業で捺染綿布を製造していた。その規模は、重要な生産手段である捺染台(捺染する綿布などを乗せる作業台)の数で示すと、10から60台程度であった。プラハで捺染業が成長した要因は、ボヘミア王国の首都として商業活動の中心地であったこと、ブルタバ(モルダウ)川の水運が利用可能であったこと、捺染業に必要な水が容易に利用できたことなどが挙げられる。さらに、この時期には、ボヘミアの他地域から人口が流入し、必要な労働力の調達が可能になっていた。他方で、プラハ市内で新たに捺染

業を起業しようとする者に対しては、既存の捺染業者が開業に反対したため、その後の捺染所の新設は、プラハの市域に隣接する地域で行われることになった⁸⁾。

北ボヘミアにおける捺染業の発展を担ったのは、ライテンベルガー家の捺染所であった。初代のJ.J. ライテンベルガー(1730-1802)は、染色工の家系に生まれ、職人としてヨーロッパ大陸各地を遍歴する中で、スイスやドイツで捺染の先進技術を習得した。ドイツでは、アウクスブルクの著名な捺染業者シューレの捺染所で技術を学んだことが注目される。ライテンベルガーは、北ボヘミアに戻った1770年頃に、紡糸工程と織布工程を問屋制で組織した捺染所を設立し、これを起点に有力な捺染業のファブリカント(Fabrikant: 問屋商人的性格を併せ持つ製造業者はファブリカントと呼ばれた)に上昇した。この捺染所では、スイスなどから捺染工を招来して、その進んだ技術の導入に努めていた。1788年には、二人の息子と共に綿布捺染所を新設して事業を拡大した。この新設の捺染所は、40台の捺染台を装備し、400人以上が作業に従事する大規模なものであった。そして、1793年に、ボルザ伯爵の捺染所を購入することになるのである。この結果、1790年代には、ドイツでも高く評価されるような優れた捺染製品を製造することが可能となった⁹⁾。

3. 19世紀前半の綿布捺染業の展開と機械制生産の進展

18世紀末以降の綿布捺染業の発展は、機械制綿紡績業の誕生を促す結果となった。ライテンベルガーは、1797年にハプスブルクで最初にイギリスで開発された紡績機械を導入して機械制紡績所を設立し、その経営に成功した。ライテンベルガーが機械制紡績所を設立した背景には、捺染用綿布の製造に必要な綿糸の生産を増大させる目的があったと考えられる。当時は、綿布生産に必要な糸の不足が、大きな問題となっていた。これ以降、北部ボヘミアを中心に機械制綿紡績業が成長を始め、拡大する綿布捺染業に良質な糸を供給することが可能となった。それ以前は、ジェニー機と思われるザクセン製の紡績機械が一部で使用されていた。しかし、太糸

生産にしか利用できず、上質な捺染用綿布の生産には適していなかった。1828年のボヘミア綿紡績業は、紡績所数64、紡錘数11万8千錘に達していた。そして、1830年代以降、ハプスブルクの機械制綿紡績業がその基盤を固めていくことにより、綿布捺染業の発展がさらに促進されることになる¹⁰⁾。

北ボヘミアで紡績機械の導入が進む中で、プラハでは、ユダヤ人捺染業者による捺染所の設立が顕著となった。1781年の皇帝ヨーゼフ二世による非カトリック教徒等に対する寛容令は、ボヘミアのユダヤ人の経済活動を活性化させた。以前から、ボヘミアのユダヤ人は、麻織物や酒類などの商業活動に従事していた。このユダヤ商人の中には、商業活動を通じて市場の動向に通じるようになり、同時に資金の蓄積を進めて綿布捺染業に進出する者が現れた。後に、プラハの代表的な綿布捺染業者の一人となるポルゲスは、19世紀初めにプラハの郊外のスミールホフに捺染所を設立することになる¹¹⁾。

綿布捺染業における機械制生産への転換は、18世紀の後半に、従来の木版や銅版による手作業に代わり、シリンダー捺染機の開発により進展した。シリンダー捺染機は、1783年に、スコットランドで発明されたもので、円筒形の銅の筒に紋様を彫り付け、回転させながら染料を綿布に捺染する機械である。18世紀末頃には、フランスのオーベルカンブの捺染所やミュールーズで使用が始まった。シリンダー捺染機は、捺染台に布を広げ木版に彫った紋様に染料を塗布して捺染する手作業に比べて、10倍以上の生産能力があったとされている。しかし、初期のシリンダー捺染機は、技術的制約により、単色かつ小さな紋様の製品の生産に限定されていた。したがって、木版や銅版を使用する手作業の捺染は、その後も継続した。複数の色を用い大柄で華麗な紋様の製品を供給できたのは木版捺染であり、仕上がりの柔らかさと優れたデザインの開発により、木版はその後も使用されたのである¹²⁾。

1830年代には、ボヘミアの有力捺染所を中心に、捺染工程の機械化が進行した。主要捺染企業は、30年代後半に、シリンダー捺染機に加えて、1834年にフランスで開発されたペロチン捺染機も導入するようになる。ペロチン捺染機は、木版や銅版による捺染の工程を機械化し、紋様を彫刻した複数の平面の版に布を送りながら捺染するもので、染料の色

数に応じて版を用意する必要があった。ただし、ペロチン捺染機は、ヨーロッパ大陸の綿布捺染業地域である程度普及したが、イギリスではほとんど使用されなかった¹³⁾。

1843年のボヘミア綿布捺染業は、74の捺染所を有していた。その生産手段の内訳は、捺染台が3458台、シリンダー捺染機が44台、ペロチン機が10台、その他の捺染用機械が32台であった。従事する職人や労働者は2万人を数え、一部の先進的な捺染所では、動力源としての蒸気機関の利用が開始されていた。ボヘミア全体の捺染綿布の生産量は、約126万反で、プラハ地域が70万反、北ボヘミアが40万反を生産していた。総生産額は、約1287万グルデンで、北ボヘミアとプラハ地域の二つの中心地域が、それぞれ約50%を占めていた¹⁴⁾。

ハプスブルクの綿工業では、1840年代半ばに、ボヘミア、ウィーン南部のニーダー・エスターライヒ、スイスと隣接するフォアアールベルクの3地域を中心に、機械制綿紡績業の成長が進んだ。その中でも、ボヘミア綿紡績業は、捺染用綿布の生産に適した、高番手の紡糸生産に傾斜していた。また、ニーダー・エスターライヒ紡績業からも糸の供給を受けていた。他方、織布工程では、力織機の導入は限定的で、間屋制で編成された手織り機による綿布生産が支配的であった。しかし、ボヘミアの織布業を間屋制で支配していたのが、北ボヘミアやプラハなどの有力捺染業者であったことに着目しなければならない。この時期の綿工業の展開の基軸は、綿布捺染業であったのである¹⁵⁾。

綿布捺染業の中心的な捺染所は、「ファブリーク資格 landesbefugte Fabrik」を有しており、捺染事業の展開に有利であった。18世紀末の「ファブリーク資格」の規定は、特権的な内容が含まれていた。具体的には、捺染ファブリークの所有者およびそこで働く者は兵役を免除され、免税の特権も認められた。しかし、これらの特典の多くは、ナポレオン戦争時に廃止された。ただし、19世紀前半頃にも存続していた規定には、重要なものが含まれていた。つまり、「ファブリーク資格」を有する捺染所所有者は、あらゆる業種の徒弟や補助者を雇用し修業させることができるという規定である。これにより、鍛冶職人、大工、家具職人などの多様な技能を持った手工業者を、ツunftの規制を受けること

なく確保できた。綿布捺染業のような新興の産業にとって、このような制度上の支援は、発展の重要な基盤となった¹⁶⁾。

1840年代における、ボヘミアの捺染製品の特徴は、中質以下の製品が、全体の80%以上を占めていたことである。主な市場は、北イタリアを含めたハプスブルク帝国内であった。しかし、他方で、一部の上質な製品が、国外に輸出されていたことに注目する必要がある。例えば、北ボヘミアに立地するライテンベルガーの製品は、ヨーロッパ市場で高く評価された。また、プラハ近隣に捺染所を構えるボルゲスの製品は、イギリスの捺染製品と遜色がないとされ、さらに、紋様の繊細さではアルザスの製品と同等であるとの評判を得ていた¹⁷⁾。

1840年代からの綿布捺染業での機械化の進行は、他方で、社会的な問題を発生させた。1844年6月に、プラハ地域の捺染企業で起こった捺染工による機械打ち壊しの暴動である。プラハ郊外のスミーホフに立地するボルゲスの捺染所では、捺染機械導入による捺染工の解雇と賃金引き下げが実施された。同捺染所では、1843年に、捺染台180の他に、同時に複数の色で染色できるシリンダー捺染機3台を備えていた。これに反発した捺染工達は、職場放棄で抵抗した。同様な捺染工の行動は、プラハ地域の他の捺染企業にも広がり、反ユダヤ感情も加わって暴動となった。さらに、7月には、北ボヘミアの繊維工業地帯の中心地であるライヒェンベルクにも飛び火した。結局、これらの捺染工達の直接行動は、いずれも軍隊の出動によって鎮圧された。しかし、このような機械打ち壊しの暴動は、綿布捺染業において機械制生産が支配的になりつつあったことを明らかにするものであった¹⁸⁾。

4. おわりに

以上のように、ボヘミアの綿布捺染業は、自ら紡績業の機械化に着手し、綿工業全体の発展を推進する結果を生み出した。他方、相対的に機械化が遅れていた織布業については、多くの捺染業者が、捺染用綿布の手織り機による生産を問屋制で組織化していた。これらの点から、ボヘミア綿工業の発展において、同地の綿布捺染業が基軸的な役割を果たしていたことは明らかである。

最後に、19世紀中葉のヨーロッパ綿布捺染業における、ボヘミア綿布捺染業の位置を同時期の推計を用いて考察したい。第1に、捺染所（20台以上の捺染台を装備）数では、イギリス280、ロシア100、フランス80、ザクセン48、ボヘミア47で、ボヘミアは5位である。ドイツ関税同盟内の有力な綿工業地域の1つであるザクセンとほぼ同等であることが注目される。第2に、捺染台数では、イギリス15800、ロシア10300、フランス3500、ボヘミア3400で4位となっている。ちなみに、優れた捺染業を有するスイスは3000である。第3に、シリンダー捺染機の台数では、イギリスが800台で突出しており、フランス80、ロシア77、ボヘミア36で、4位である。そして、第4に、年間生産量では、イギリスが1500万反で他国を圧倒し、ロシア240万反、フランス240万反、ボヘミア140万反で、ボヘミアはここでも4位となっているのである。以上のことから、ボヘミア綿布捺染業が、19世紀中葉のヨーロッパの綿布捺染業において、有力な地位を占めていたことは明らかである¹⁹⁾。

注

- 1) Chapman and Chassagne (1981)、村田 (1988)、作道 (1984) を参照。オーベルカンプのジュイ工場については、ブレディフ (1990) も参照。
- 2) 御園生 (1989) 参照。
- 3) 作道 (1984)、93頁。
- 4) Matis (1984)、S.146-147。フロイデンベルガー (2003)、338頁。
- 5) イギリスとフランスにおける、キャリコの製造・貿易を規制する法律については、Greene (2014)、pp. 528-529 を参照。
- 6) 御園生 (1983)、91頁。
- 7) Otruba (1965)、S. 260-261、Slovak (1914)、S. 288、Salz (1913)、S.345。
- 8) Carter (1975)、p.133。
- 9) 御園生 (1983)、92-93頁。
- 10) 御園生 (1983)、95頁。
- 11) 丹後 (1986)、66-76、101-107頁、Carter (1975)、pp.134-137。
- 12) Storey (1992)、pp. 27-49、50-54、61-66、67-74。

- 13) Kurrer(1844), 巻末の付表 Tabelle I.
- 14) *Tafeln für das Jahr 1841* (1844), C. Cultur, 41. Industrie, Tafel 41, VIII. Baumwollwaaren, Druckerei の記述による。なおこの統計集には頁が付されていない。
- 15) 御園生 (1983)、101-104頁。
- 16) Slokar (1914), S. 126-142.
- 17) *Tafeln für das Jahr 1841* (1844), C. Cultur, 41. Industrie, Tafel 41, VIII. Baumwollwaaren, Druckerei の記述による。
- 18) Kurrer(1844), 巻末の付表 Tabelle IV ,Klíma, A. (1986)、稲野 (1986)。
- 19) Kurrer(1844), 巻末の付表 Tabelle I.

統計集

Die k.k.Direction der administrativen Statistik , *Tafeln zur Statistik der österreichischen Monarchie für das Jahr 1841*, 1844, Wien. 注では、*Tafeln für das Jahr 1841* (1844) と略記する。

参考文献

- Carter, F. W.(1975), “ The Cotton Printing Industry in Prague 1766-1873 ”, *Textile History*, Vol. 6.
- Chapman, S. D. and S. Chassagne (1981), *European Textile Printers in the Eighteens Century*, London.
- Greene, S. W. (2014), *Wearable Prints, 1760-1860*, Kent.
- Klíma, A. (1986), „Die Arbeiterunruhen in Böhmen 1844“, in : H. Reinalter (hrsg.), *Demokratische und soziale Protestbewegungen in Mitteleuropa 1815-1848/1849*, Frankfurt am Main.
- Kurrer, W. H. v. (1844), *Geschichte der Zeugdruckerei bis auf neueste Zeit*, Nürnberg.
- Matis, H. (1984), „ Betriebsorganisation, Arbeitsverfassung und Struktur des Arbeitsmarktes in der Phase der » Proto-Industrialisierung«, in : Matis, F. und J. Riedmann (hersg.), *Exportgewerbe und Außenhandel vor der Industriellen Revolution*,

- Innsbruck.
- Otruba, G. (1965), „ Anfänge und Verbreitung der böhmischen Manufakturen bis zum Beginn des 19. Jahrhunderts (1820)“, *Bohemia*, Bd. 6.
- Otruba, G. (1981), „ Die Familie Leitenberger“, in : F. Seibt, (hersg.), *Lebensbilder zur Geschichte der böhmischen Länder*, Bd. 4.
- Slokar, J. (1914), *Geschichte der österreichischen Industrie und ihrer Förderung unter Kaiser Franz I*, Wien.
- Salz, A. (1913), *Geschichte der Böhmisches Industrie in der Neuzeit*, München und Leipzig.
- Storey, J. (1992), *The Thames and Hudson Manual of Textile Printing*, rev.ed., London.
- 稲野 強 (1986)、「1844年の「ボヘミアの騒擾」—更紗捺染工の機械打ち壊し運動を中心に」、『社研研究シリーズ』(早稲田大学社会科学研究所) 21号
- 黒澤隆文 (2002)、『近代スイス経済の形成—地域主権と高ライン地域の産業革命』京都大学学術出版会
- 作道 潤 (1984)、「プロト工業化期のフランスにおける綿布捺染業—ジュイ工場の事例を中心として」、神戸大学西洋経済史研究室編『山瀬善一先生還暦記念論文集：ヨーロッパの展開における生活と経済』晃洋書房
- 丹後杏一 (1986)、『オーストリア近代国家形成史—マリア・テレジア、ヨーゼフ二世とヨーゼフ主義』山川出版社
- 辻ますみ (1996)、『ヨーロッパのテキスタイル史』岩崎美術社
- 深沢克己 (2007)、『商人と更紗—近世フランス＝レヴァント貿易史』東京大学出版会
- J. ブレディフ (1990)、深井晃子訳『フランスの更紗—ジュイ工場の歴史とデザイン』平凡社
- H. フロイデンベルガー (2003)、御園生 眞訳「オーストリアにおけるプロト工業的發展局面—社会的習得過程としてのプロト工業化」、F. メンデルス /R. ブラウン他著、篠塚信義・石坂昭雄・安元稔編訳『西欧近代と農村工業』北海道大学図書刊行会
- 服部春彦 (1968)、『フランス産業革命論』未來社
- 村田八朗 (1988)、「イギリスにおける捺染業の発

展—ピール家を中心に」、『経済学論叢』（同志社大学）、第39巻第3号

御園生 眞（1983）、「19世紀中葉におけるペーメン（チェコ）機械制綿紡績業の成立」、『経済学研究』（北海道大学）、第33巻第1号

御園生 眞（1989）、「18世紀後半におけるペーメン（チェコ）麻織物工業の展開」、『獨協大学経済学研究』第52号

御園生 眞（2003）、「十九世紀前半のハプスブルク帝国における工業化の特徴—地域工業化の視点から」、篠塚信義・石坂昭雄・高橋秀行編著『地域工業化の比較史的研究』北海道大学図書刊行会所収